

橋本侃先生、ありがとう

濱 田 あやの

「反応がなければ、欠席だ」

「そんな辞書、捨てちまえ」

とんでもない先生が来た――

橋本先生に初めて会ったのは、大学一年生の時。後期が始まって一ヶ月ほど経った頃だった。当初授業を担当されていた鈴木先生が逝去され、その後を引き継いでくださったのが橋本先生だった。チャイムが鳴って教室に入ってくるなりドアの鍵をしめ、「俺が教室に入ってきた後の入室は認めないから遅刻しないように」と仰った。続いて、授業中に飛び出した上述の発言に、私を含めクラスの全員がびっくり仰天。最初の印象は最悪だった。

授業中、先生は積極的に学生の発言を求める。指名されて何も答えずにいると、「ん？ 反応がないな、欠席か？」と言われる。また、学生の持参した辞書に求めている説明がないと、「なんたる！ そんな辞書は捨てちまえ」と言われる。それまでとは全く異なるやり方の授業に、クラス全員が戸惑っていた。ここで、橋本先生

の名誉のために言っておかねばならないが、これらの発言は半ば冗談で、反応するまで問いは続くので、実際に欠席扱いにされたことはなかったし、また、辞書も実際に捨てられたことはなかった。このような橋本流の授業に戸惑いながらも、しばらくすると、これらの強烈な発言は先生なりの叱咤激励であることを、私たちは感じ取っていた。

大学は自ら学ぶ場所。席に座っているだけでは意味がない。積極的に学ぶためには自ら考えて、自分の言葉で語ることが必要だ。「反応がなければ欠席」とは、それを実践させるための橋本先生ならではの励ましであったと思う。小・中・高の学校生活を通して、黙って座って先生の説明を聞くという授業に慣れてしまっていた私は、反応するということに最初は戸惑ったものだ。しかし、慣れるに従って面白いと思うようになっていった。大学の授業は違う、と実感したのもこの時だった。橋本先生が示してくれた、学ぶ側が主体となる授業は、教壇に立つ今現在、私にとって一層重要な教えとなっている。

また、辞書についても、目から鱗が落ちるような衝撃だった。辞書は完璧ではない。だから、一冊だけを引いて満足せずに、可能な限り複数の辞書にあたって調べる。「辞書捨てちまえ」発言は、辞書に全て記されている、という私の考えを一新させた。おかげで、辞書を引き比べることの面白さを覚えた。

先生との長い付き合いが始まったのは、卒業研究ゼミである。先に述べた一年次の授業で、文学は人間を扱っているのだからいろいろな反応があってもいいこと、正解は一つではないこと、だから文学は面白い、とくに演劇は台本が同じでも演じ方によって全く異なるものになる、と繰り返し仰っていたのを覚えている。わずか二ヶ月半ほどの授業だったが、光の当て方を変えると異なる表情をみせる「演劇」というものに魅力を感じ、

さらに勉強してみたい、橋本先生に教わりたい、という理由で、私は研究室の扉を叩いたのである。

快活で駄洒落好きな先生の人柄もあって、ゼミは常に愉快で楽しい時間だった。合宿では、夜の宴会でシェイクスピアを演じてみたり、英語ゲームや手品をしたり、お酒を酌み交わしながら人生相談などを繰り広げたりして、夜が更けるまで学生たちに付き合ってくださった。当のゼミ生達は、酒豪の先生のために、一升瓶の赤ワインを毎回欠かさず調達したものである。

ゼミといえば忘れないのが、論文執筆だ。楽しいゼミだったが、これだけは辛くとても大変だった。それゆえに、それぞれの学生が得たものも大きいだろう。そして、その大きな山を越えられたのは、橋本先生の厳しくも温かい大きな愛情に裏打ちされた熱心な指導があったからである。

論文執筆作業の基本は、先生との面接。学生が書いたものについて先生が疑問に思った部分を質問し、それに対して学生が答える、というスタイルだった。指摘された部分の答えを用意し、先生の前に座り、説明をする。じっくり聞いたあとで、「それで？何が言いたいの？」と尋ねられ、自分なりの主張をしても先生を納得させられなければ、「はい、出直し！」と言われ、選手交代、別の学生がチャレンジする。自信がない部分は見抜かれ、「本当にそうか？原文にそう書いてあるか？」と突っ込まれる。思い込みや誤解のある部分などは「Oh, No!」なんたる！」と言われ却下。そのようなやり取りを、何度も何度も繰り返し、それぞれの学生の論文が納得いく仕上がりになるまで、根気よく丁寧に指導してくださった。提出日が迫っている時期は、ゼミ室でご飯を炊き、生協でおかずを調達し、夕飯を食べながら、二十号館の閉館時間二十二時まで、ゼミ生みんなで粘ったことも良い思い出である。

このプロセスを通して、シェイクスピア劇についてだけでなく、論文とは何かということ、文章を書くということに読み手を思いやる姿勢が必要だということを教わった。相手を納得させられるように論理的に構築するだけでなく、読み手の立場に立ってわかりやすく書くということが、思いのほか難しく、しかし、とても重要であることを繰り返し指摘された。論文執筆作業を通して、相手への配慮や思いやりの心を改めて学んだと思う。

大学院進学後も、アメリカ・イギリス両国への留学中も、橋本先生にはとてもお世話になった。留学中はEメールで近況報告をしていたのだが、お忙しい中、先生はいつもすぐにお返事を下さった。その中には必ずといっていいほど駄洒落があり、それを読んで懐かしく温かいほっとした気持ちになったのをよく覚えている。帰国後、教壇に立ちながら博士論文に取り組んでいた時期も、時折、研究室の戸を叩いた。開けると、「お、久しぶりだな。調子はどうだ」と言って、いつもと変わらない笑顔で迎えて下さった。博士論文を書き上げた時も、同じ笑顔でとても喜んで下さった。今でも扉を開けると、先生の笑顔がそこにあるような気がしてならない。

「それが運のつきだな」——大学院に進学した時も、教鞭をとることになった時も、橋本先生は笑いながらそう仰った。私が研究の道に入ったのは、橋本ゼミに入ってからだと。しかし振り返ると、一年生の時の最悪な出会いから、実は始まっていたのではないかと思う。先生のおかげで、文学の面白さ、演劇の魅力に気づくことができたのだ。

卒業式の日、先生からいただいた言葉の中に「人生はリハーサルのない芝居」というフレーズがあった。生

前から、シェイクスピアの弟子と仰っていた先生らしい。現世でのご自分の役割を演じきり、今頃は天国で新たな役を張りきって楽しく演じていることだろう。大好きな赤ワインを片手に。私も自分の役を精一杯生き抜くことが、先生への最大の恩返しになると思っている。

橋本先生、先生に出会えたことに心からの感謝を。そして、またいつか会う日まで――再見！